

幕末期宇和島藩の動向(12)

—— 伊達宗城を中心に ——

三 好 昌 文

前号 (第 12 巻第 4 号)

B) 攘夷の実行～第一次幕長戦争

ウ) 慶応の改革と富国強兵策

軍事改革

C) 第二次幕長戦争～王政復古

ア) 長州処分問題—長州藩主父子の江戸招致

イ) 第二次幕長戦争

薩摩藩と長州藩

第二次幕長戦争への動き

本号

宇和島藩の出兵

富国強兵策の強化と英公使パークスの訪問

アーネスト・サトウの訪問

ウ) 宇和島藩の割拠体制

対英接近と軍制改革

臨戦態勢の強化

宇和島藩の出兵

慶長 2 年正月、薩長同盟が成立し、薩長討幕派は討幕と統一国家（皇国）の形成という共通の目標を明らかにし、とくに長州藩は挙藩軍事体制を樹立していた。薩長同盟に関する情報は宇和島藩等には漏洩されていない。松平春嶽は再征中の大坂等における民衆の動乱、再征軍の分裂による失敗を懸念し、薩摩藩はもっと積極的に征長に反対していた。

このなかで、同年 4 月、長州藩第二奇兵隊立石孫一郎ら 100 余名の反乱と倉

敷代官所襲撃を機として、老中板倉勝静から藩主宗徳宛に幕命が届いた¹⁾。宇和島藩は、同月25日、橋本喜久馬ら5人を前隊煩手に、北川弥惣兵衛ら5人に斥候隊を、さらに藩医能島随安ら3人、在医卯之町医師良逸ら5人を動員した²⁾。幕府の軍目付竹尾戸一郎らは24日に三机浦に上陸していた。5月3日、竹尾への届け出の「覚」には、藩兵は旗本隊内士分250人程、足軽320人程、陪卒並持夫の類1,800人程、先手（前隊）1隊内士分100人程、足軽210人程、陪卒並持夫之類800人程、外に船付水主類4,600人程となっている。三机浦には橋本郷右衛門が先発していたが、家老桑折駿河・目付井関斎右門も行って竹尾に応接した。竹尾一行は13日に宇和島に来て、宍戸弥左衛門・伊能下野が応待した。

5月22日、藩は原田玄太に施条銃の軍用玉製造引受けを命じ、玄太はその製造所に出勤して足軽中を指揮した³⁾。森猪之助組盛吉も同じく軍用玉製造ならびに足軽中威遠流生兵取立方を命ぜられた。「近来銃数増加し」1挺につき300発を準備し、弾薬も相応に製造させた。同日、後隊にも施条銃を渡すことにしたが、これは出陣しないので、弾薬は1挺につき30～50発の在来のを渡している。

5月25日、桜田主水が広島から帰り、大目付の6月5日に長州藩に「諸手一同討入」りの命を伝えた⁴⁾。藩は、6月1日、前隊の一部（番頭1人、物頭2人、戦士約10人、軍監河原治左衛門）を三机浦に先発させ、関船2隻・鯨船2隻を同港に回航させ、船奉行に矢野・保内辺の渡海船を命令次第回航させることにした。西園寺雪江は征長軍の所在する広島に派遣され、5月27日に竹尾は三机浦に出発した。6月朔日、宗徳は前隊の出陣者に拝謁を許した。翌日、宗徳出馬の場合、伊能下野を前隊に出張させて供とした。前隊の陣容は、斥候隊山下清記（使番）、西園寺雪江（目付）ら7人の他小人、旗指揮樋口庄之助、銃頭鈴木忠右衛門（一先）・三条目十郎兵衛（二先）・入江左吉（三先）・梶田貞吉（左）、望月八郎佐衛門（右）、森猪之助（後）、半隊司令士板倉琢磨ら6人、大銃頭取（二座）宇都宮九太夫ら3人、煩手西園寺源八郎ら27人（虎ノ間、中ノ間・徒士を含む）、武者奉行須藤旦、馬戦士藤好市右衛門ら54人、徒支配松根内蔵、

その配下 28 人、旗差配松本司書、徒目付友田勇右衛門、該目付井関斎右衛門、該岩村寛左衛門ら 4 人、喇叭手渡辺藤太郎、使番桜田大助ら 6 人、近習穴戸右近ら 3 人、小性大橋此面ら 28 人、馬役角田幸右衛門、小姓頭大西登、目付井関新吾、遊兵田手次郎太夫、儒者上甲貞一、医者林玄仲ら 10 人、祐筆小柳浅右衛門ら 2 人、旗本頭桑折駿河、その配下に書役、走使各 1 人、老職松根図書、配下同様、徒目付 1 人、台所奉行 1 人、料理方 4 人、坊主 5 人、小荷駄奉行、元締各 1 人、軍方近沢与五兵衛ら 8 人、勘定方 8 人、作事奉行林基吉郎、同証人 4 人、郡目付添橋本郷右衛門、その配下 3 人、前隊軍監河原治左衛門となっている。銃隊、砲隊は近代化されているが、全体的に旧態の残存も認められる。出陣者は夫銀（米 1 俵・500 目、金 1 両銀 105 匁として）を給知持金 5 両 1 歩、切米扶持の給知格は 5 両、中之間 3 両 3 歩 1 朱、徒以下は 2 両 1 歩 2 朱、台所坊主目見以下は 1 両 3 歩 3 朱、足輕帯刀者は 1 両 1 歩 3 朱、小者は 2 歩と定められた。後隊は宇和島に残留したのであり、藩は前隊を中心に長州藩攻撃の準備を整えたといえることができる。

6 月 4 日、加幡又市が広島から大目付永井主水正からの書類を持参して帰った⁵⁾。その中に、長州藩家老、長防士民中、三末家からの封土減封、藩主父子の処分に関する歎願とともに長征に対する徹底抗戦の意志を示した文言も見える。これを示して、永井は宇和島藩・阿波藩に攻撃の手順を示した。翌 5 日、出陣の儀式があり、6 日、前隊大頭桜田大炊ら前隊が宗城・宗徳に謁見して出陣し、同時に都築莊蔵が広島に派遣された。松木角右衛門は九州へ派遣され、8 日、西園寺雪江が幕府御徒目付堤省三を伴って広島から帰着し、さらに宇和島藩が長州処分の罪科の主意を乱したのに対し、その説明を堤がしている。

宇和島藩は三机出陣とともに、幕府軍の真意を把握することに努めている。同月 9 日、桑折駿河・須藤但馬は応接として、西園寺・上甲貞一は挨拶として、堤の寓居（増原七右衛門宅）に行き、10 日には井関斎右衛門・田手次郎太夫が松山・広島に派遣された。両人の若年寄京極主膳正（在松山）への届書には⁶⁾、宇和島藩は上之関一之先の攻撃を命ぜられていたが、「人数引纏直様渡航可仕之

処、於攻掛之都合何分早速討入候様諸事相運兼、右等之意味も有之候ニ付、先日以來相伺之趣も御坐候而」、幕府からの指示を得たが、「御差図通難取掛次第有之、其当惑仕候」と訴えている。長州藩海岸を堅固に防禦しているところへ、「我ハ僅少之人数ヲ以、二十余里洪濤を凌き、剩薄弱之漁舟商船ニ而乗著候義、如何も無謀之至候」と長州藩制圧の軍事力はないことを訴え、「先日より領分北境之海岸三机浦へ先鋒差出置候得共、何等と渡航討入之機会策略ヲ得候迄相扣候処仕度」と実情を述べている。宇和島藩は征長の名目は支持しながら、政治・軍事情勢を考慮して、実戦は回避しようとしている。これに対し、京極は8日付で5日からの総攻撃の開始に合わせ、急速な出兵を求めている。松山藩は、5日付で出陣と知らせてきている。松根図書・清水飛驒は堤省三を瞞着して、宗城の本意を知らしめることなく帰ったという。大洲藩は宇和島藩と合意していた。阿波藩も「若年寄之指揮ニも随候訳柄無之ニ付」として出兵を拒否したことを告げている。宇和島藩は幕府軍と長州軍との間で、長州処分論を唱えながら姿勢を後退させていることになる。松山藩のみが幕府若年寄京極高富に督励され、軍艦富士山丸（1864、ニューヨークで建造の木造艦で砲12門を装備、1,000トン）・大江丸に援護されて周防大島を攻撃した。宇和島藩兵は、英公使パークスの宇和島訪問による警衛を理由として、6月23日には先隊中約200人が帰藩した⁷⁾。

富国強兵策の強化と英公使パークスの訪問

慶応2年3月17日、家老松根図書が長崎に派遣されることになった⁸⁾。4月7日には、清水飛驒が脳病の治療のため、長崎の蘭医（ネーデルランド貿易会社代理人）ボードウインのもとに行くことが許可された。本荘新左衛門子新之丞・脇田孫兵衛子政一が長崎へ英学修行に行くことになり、5月11日に出発した⁹⁾。とくに松根には貿易、軍器、蒸気船購入の任務があった。4月17日に出発している。『松根図書日記』によると¹⁰⁾ 5月16日出帆とあり、29日に長崎に着いている。蒸気船購入の発想は御荘組城辺村庄屋矢野安芸三郎（貞興）の発想であった。同日記5月21日条に、図書の子内蔵から書状が届き、

「火船」を購入し、23日に乗船帰国すると伝え、図書は五代才助が6月初旬に帰国するので親交を保つよう、宇和島に返書している。長崎では内蔵の宿・西浜町横町尾崎屋卯吉方に宿泊した。萩森巖助・矢野安芸三郎・五代才助らに早速会っている。¹¹⁾長崎で図書・内蔵と交流のあったのは、この他に肥後藩士莊村助左衛門・越前藩士八木八十八（日下部直見，太郎，御先物頭）・清水飛驒・有田彦兵衛，越前藩木内甚兵衛・薩摩藩士村山下総らに会っている。6月5日には楠本伊篤の紹介で、アレキサンダー・フォン・シーボルト（伊篤の異母弟，パークスの通訳官）に会った。この時，パークスの宇和島訪問が話し合われたのであろう。図書は英国領事フレンチ，パークス，キング提督にも会っている。

松根内蔵の『上海日記』によると¹²⁾内蔵は藩士萩森巖助・恒之介を同伴して、4月17日に英国商船ヘンフルクに乗船して長崎を出航、20日に上海港に着いている。和蘭領事にボードウィンの紹介状を渡し、帰船すると「亜米利加行の薩人兩人」が来て、長崎で同藩士野村宗七（盛秀）からの書状、伝言を伝えた。つまり、内蔵には薩摩藩、とくに五代才助の援助を受けていたことがわかる。上海滞在中は蘭人ホンヘル世話になり、領事クルースに面会、上海での異文化に積極的に接している。22日、薩摩藩士湯地治右衛門（ロンドン・米国へ行く）・種ヶ島鯛輔（鯛蔵，敬輔）・仁礼平蔵（平助，ロンドン・米国に行く）・江夏萩助（喜蔵）・吉原弥太郎と懇話している。23日、領事方へ行き、「ヘンホルリ船買入ノ談判」を完了させている。これが蒸気船購入の交渉であろう。内蔵は26日上海発、翌日夜長崎に帰港した。図書は上海を「（○前略）商売人の高利を貪る事、或はたましあふの事ハ、長崎に百倍せり、然し交易のさかんなる事、目お驚かせり、洋人の咄しにも、横浜杯の二倍も三倍も有るへしと咄せり、西洋館ハ皆四階五階ニ作り、中々盛大にして、川筋より軍艦、蒸気帆船百三四十艘も滞泊せり」と述べている。この認識は宇和島藩の富国強兵策にとって、一つの目標を示すものになったであろう。

父図書が長崎に赴いたころ、内蔵はすでに蒸気船を宇和島に回航する準備を進めていた¹³⁾すでに、3月22日には、中山小右衛門・前原喜市（巧山）・矢野

安芸三郎を乗組員とし、田手次郎太夫（目付順列）が指揮を命ぜられ、待機していた。宇和島藩は「伊達遠江守内萩森厳助」の名で、5月13日に長崎奉行へ届けている。「阿蘭陀ホートイン所持之蒸気兵庫船壹艘、此庫主人ヨリ致買入候様被申付候ニ付」として、購入の許可を求めた。宇和島用達有田彦兵衛の5月15日付の「覚」によると、鉄船で代価は洋銀3万7,000ドル、内9,000ドルを7月初旬までに支払い、残る3万8,000ドルは4カ年賦として1年に7,000ドルずつ支払うとあり、船名は天保録（長さ22間、2本柱）と決定されている。つまり、船齢約30年の古船であった。同船は6月8日に長崎出航、第二次幕長戦争開始の中、10日に小倉藩領田の浦港に入り、同藩に依頼された大小銃を陸に上げ、11日に宇和島に着いた。つまり、幕長戦争のなかで、長州側から遠望できる田の浦に武器を揚げ、やがてこれらの大小銃は長州藩の小倉城攻撃前に捕獲されているのだから、長州藩側から見れば、松根図書この行為は明確な利敵行為になる。

帰藩後、藩主宗徳と宗城は天保録を実見して、17日に八幡浜まで運航させた。22日井関斎右衛門に元締兼物産方引受・蒸気船船将、田手次郎太夫に蒸気船船将（10カ月で交代）中山小右衛門・前原喜市らに乗組、林基吉郎に物産方蒸気船掛り、尾川半左衛門に兼物産方御用総支配、兵庫塩屋安兵衛を用達になど、多くの人事や褒賞がなされた。天保録は宇和島藩の長崎貿易、兵庫開港に伴う国産物運送の役目を担っていた¹⁴⁾

天保録は、慶応2年10月、宇和島を出港し長崎に行ったが、船体の故障がはなはだしく、時化のため荷物を腐らせた。このため、井関、中山らは修理をあきらめて、慶応3年に入り売却された¹⁵⁾

宇和島藩の慶応の改革と薩摩藩、とくに五代才助との関係が深いことは前述した。五代は欧州からの帰国後も長崎に滞留して、宇和島藩等と密接な関係を有し、松根図書・内蔵父子をはじめ、田手次郎太夫・若松総兵衛・大野昌三郎、松尾臣善¹⁶⁾ 西園寺雪江（公成）らとの交流が深かった。とくに、第二次幕長戦争の戦況は詳細に図書に報告されている。その目的は薩摩藩の戦略、宇和島藩

が征長軍の一翼として参戦することを阻止することにあつたと考えられる¹⁷⁾

慶応2年7月29日付函書宛才助書翰では、すでに松尾臣善と昵懇であり、米春機関の周旋、氷機関の輸入と伝習、小銃の輸入、銀札仕法、銅山開発について述べている。7月29日付別紙書翰では、6月6日の幕府軍艦・松山藩兵の大島攻撃による戦争の発端から勝利まで、馬関口(小倉口)・石州口・芸州口の四境戦争の情報を知らせている。とくに長州軍の勝利が強調されている。「乍恐貴兄松山之復徹を踏むべからず」と警告した。幕府軍艦回天丸(英国より新しく購入)に、宇和島藩士上田一学・賀来瀧次郎が乗船していたことは、宇和島藩の微妙な政治的立場を表していよう。

薩摩藩、五代才助の宇和島藩索制策の一つが英公使パークス(Harrys. Parkes, 第2代駐日公使, 慶応元年閏5月16日着任)の宇和島訪問であつた。慶応2年初頭、薩長同盟の成立によって、幕府と薩長倒幕勢力との対立は決定的となり、そのなかで、パークスは長崎(領事ガワーが駐在)、鹿児島への訪問を計画した。慶応2年2月、英商グラヴァーが鹿児島を訪問して、パークスの訪問を取り付けた¹⁸⁾ 英国は外相クラレンドンの見解に示されるように、中立維持の大原則を政策とし、貿易の発展のために、幕府の貿易独占を封じ、大名の貿易参加を希望していた。渡英した五代才助・松本弘安らに接したクラレンドン外相の訓令に沿って、パークスは行動した。

慶応2年5月21日、横浜出航、24日下関に寄港して高杉晋作・伊藤俊輔に会い、27日に長崎に到着した¹⁹⁾ パークスは長崎奉行能勢頼之に鹿児島訪問を納得させ、6月16日、キング提督の旗艦プリンセス・ロイヤル、パークスの乗艦サラミス、サーペントの3隻で訪問し、21日に出航するまで、連日盛んに交歓した。パークスはその訪問に満足し、内政的には薩摩と同盟関係にある長州藩にも影響することであり、すでに長崎でパークスは宇和島訪問も考慮していた。その目的は大名との公式訪問の機会を薩長以外にも増やし、諸藩との貿易を推進することにあつた。

6月21日、長崎で仏公使ロッシュに会い、幕長戦争の調停について協議し、

26 日下関海峡を出帆して翌日、宇和島に入港した。パークスの訪問を求めた松根図書は、薩摩藩と違ってパークスの訪問に長崎奉行の認可書を求めている。宇和島藩は、5月27日、大洲藩三瀬周三に従って英学を学んでいた松崎久太郎弟健二郎の長崎における修行を許可し、萩森巖助とともに行くことになった。英学のみならず、仏蘭西・独逸等、広く洋学を学ぶものを募り、結局健二郎は12月2日に薩摩へ行った²⁰⁾ さらに6月2日、藩は入江左吉・森猪之助の要望により、近時大砲修行者が増加し、「砲術書を互に質問シ、弾道之算術、地理測量機械造法ニ至ル迄、詳ニ講究致度ト篤志者ヨリ申出アリ」、砲術書の貸与、「元込旋条銃新製ノ分」の稽古撃ちを許可し、善兵衛・勘右衛門らに伝授を認めている²¹⁾ 宇和島藩側にも、幕長戦争出兵を目前にして、軍事・経済力の強化と洋学の摂取が必須であった。

「竜山公記」によると²²⁾ 産物御用・汽船購入のため長崎に行っていた松根図書、五代才助に用件のあった内蔵、さらに若年寄清水飛驒、萩森巖助らもいた。6月4日、楠本伊篤が図書にパークスの通訳官アレキサンダー・フォン・シーボルトが面会したいと紹介した。翌5日、図書はシーボルトの鳴滝の寓居を訪問した。シーボルトは今度パークスが艦隊を率いて鹿児島を訪問すると告げた。

「此艦（○プリンセス・ローエル号、3,129トン、馬力400・乗員850人・大砲73門）」は最大で再び来日することはないだろう。「貴藩の君公（○宗城）」は西洋の事物を好むというので、宇和島に回航して一覽させ、かつ懇親を結びたいがどうかと言った。図書は「主人多年ノ素願ナリ」、しかし、現在長征のため幕府の軍目付が来ているので、幕府の許可を得る必要があると説明し、パークスから長崎奉行に宇和島訪問を届け、許可証・宇和島藩への照会書を貰ってはどうかと述べた。パークスが長崎奉行に照会書・印証を請求すると、奉行は宇和島と聞いて「少々色ヲ変シタルモ承諾」し、印証・照会書の発行は支障があるが、重役にその心得を告げるといった。

6日夕刻、図書は鳴滝でパークスに面会し、パークスとシーボルトは奉行所に行き行って督促した。7日、図書・内蔵父子、五代・服部清左衛門・山田屋寛兵

衛が宴会中、有田彦助（彦兵衛）が来て、長崎奉行所からの召喚を告げ、能勢頼之の「口達覚」²³⁾を図書は受領した。その内容は薪水給与令の形式的適用である。図書はパークスが「君侯」に面会を求めた場合の措置を質した。能勢は「奉行ノ許可スベキ権限ノ外ナレバ、江戸へ伺ノ上面晤ス可シト謝断ス可シ」と、公式訪問の形式になることを回避しようとした。図書は「然レバ宇和島ノ如キ辺境ハ外国人ヲ見タル者サヘ少ク、中ニハ事理ヲ弁セサル者アリ、応接ノ末彼若承服セズ、幕府へ伺フノ余日無ク、伺ザレバ引払ザル時ハ兵端ヲ開ク可シ、宇和島ニ於一ノ応接ヲ違シヨリ天下ノ乱階ト為ルモ苦カラズヤ」と畳みかけ、さらに城内への招致、軍艦見学者の件などを事実上承諾させた。図書は五代に能勢との面談の実況を話し、五代は「兄ノ狡黠ニハ困レリ、奉行ヲ掌中ニ弄ト言ベシ」と言っている。

図書は11日に帰国、13日、藩は郡奉行・町奉行宛に通達を出した。公使パークスに無礼のないよう、「何様差向平穩ニ相心得、見物罷越候向者、軍艦ニ不乗付、間遠ニ見物可致」と布告を命じた。藩は大坂町奉行所に伺書を提出し、パークスとの応接問題に続いて、万一の異変に備えるため、「公辺御手数相掛候様押移候も難斗ニ付、十分手厚ニ警衛向為仕度処、此度征長ニ付而者、領分北境江モ人数差出居、元来小藩之義、何分両端ニ難行届、依而英船引払候迄、渡航進撃者相扣度候間（○下略）」として、パークス来航を口実にして長州攻撃を回避しようとした。勿論幕府は撤兵を認めなかったが、藩は三机出張の藩兵を帰藩させた。

慶応2年7月朔日付の図書宛五代書翰では²⁴⁾四境戦争について、「然ハ長防之事件、既ニ兵端相開、四方長兵大勝之由。幕運此時地ニ落候、（○中略）尊藩ニモ松山一同既ニ出軍之時機相迫候処、英艦之一策ニ而災ひ御遁れ相成候半」と言い、パークスの訪問は征長出兵阻止のための策略であったことを明言している。薩摩藩は翼幕論に立つ宇和島藩に少なくとも中立性を保たせる方策を考えたのである。当時、薩摩藩は幕府に対抗して長州藩を支持し、かつ幕府の貿易独占に対し、「天下列藩と云へとも和親之国ニ無相違候付」、薩摩は英国との

貿易を望み、「小生ニモ既ニ欧州各国の形勢も実験^(ママ)いたし居候へハ、大君而已相開候而も日本国の相開たるとハ難申」と、宇和島藩の富国強兵策に刺激を加えている。また、フランス（ナポレオン三世、公使ロッシュ）の幕府に対する莫大な軍事・経済援助、とくに外国奉行柴田剛仲^{たけなか}の訪仏に触れて、「生おもふニ、仏政府者容易ニ動へからず」と結論している。パークスの宇和島訪問は、英国の対日政策と薩摩の対幕府戦略の結合によると言えよう。

さて、「竜山公記」の記事に帰ろう。宇和島藩は松根図書を軸に応接の準備を進め、松根内蔵・萩森厳助・大野昌三郎・三瀬周三の4人を交代で詰めさせた。樺崎番所には中軍・後隊中、ライフル銃所用の足軽10人を置き、見物人等の取り締まりとし、上陸した「英国下管」には足軽3人を付き添いとし、将官の迎馬に西洋鞍を置き、その騎馬警衛10騎・警固足軽中軍撒兵2隊にライフル銃を持たせた。警固の騎馬の番頭は鈴木忠右衛門・入江左吉であった。宗城居館の南御殿の門には、後隊足軽16人がライフル銃を所持して警固に当たった。町人・農民の軍艦見学は、1丁以遠の場所とされている。

6月24日午後1時、号砲1発、測量船サーペント（長さ109フィート、馬力200、大砲4門、乗組100人）が入港し、恵比須山砲台下に碇泊し、いったん出港し、3時、プリンセス・ローエル号に従って入港し、この時、双方は15発の祝砲を放った。藩の通訳は萩森・三瀬であったが、アレキサンダーが乗艦していたため、通訳を必要としなかった。この日、三机へ出張の前隊・中隊全員が宇和島に帰った。松根父子・井関・田手・三瀬はプリンセス・ローエル号に乗艦し、パークスは下関を経て来航すると告げられた。パークスは下関海峡で仏公使ロッシュならびに桂小五郎（木戸孝允）・伊藤俊輔に会見し、幕長関係の情報を確認し、ロッシュに主導権を握らせることはなかった。25日午前9時、松根等はローエル号に行き、砲術・医術等の伝習を依頼した。宗城・宗徳も密かに乗艦している。26日午前9時、松根、宗城・宗徳が再び行った。27日午前10時、パークスの乗艦サラミス（長さ225フィート、835トン、馬力250、乗組177人）が来着した。午後4時頃から城内三の丸で、英兵約200人が、ついで宇和

島藩兵がそれぞれ調練した。28日10時、宗城・宗徳は公式にパークスを訪問(供は老中・若年寄以下100人)、「艦隊操練、大小銃手続及発砲ヲ為し」た。午後3時、パークスと士官等20人が上陸、樺崎から西洋鞍を置いた馬20匹に乗って南御殿に行った。すべて日本風の接待で、2階で酒宴、庭で剣術3組、御本間脇で三弦音楽、本間で饗応の後帰艦した。29日は雨のため出帆せず、宗城と春山がサラミスに行き(春山は前日船医の診察を受けていた)、パークスは藩船の船旗を希望したので、これを新調した。藩側は英国旗を希望し、難色を示したものの交換された。7月2日朝6時半頃に艦隊は出港し、土佐沖を経て横浜へ向かった。大坂城代への報告には、パークスは「近来日本江通信を結候ニ付、広日本国内諸侯江懇親を結度、且於日本条約面之上ニ異変無之候ハ、於英国決而異心無之間致安心呉、此旨日本国中へ普為知貫、追々諸藩江罷越候所存之旨(○下略)」と述べていたという。

6月28日、多田組新城村庄屋上甲義武ら村民9人は、英国艦隊の見物に行き、大船1艘外に2艘を見て、「何とも目ヲ驚カス義ニ而、筆紙ニ難尽事とも也」、「右軍艦ハセカイ中ニ三艘と申由ニ而見事之事とも也」と、日記に書いている。²⁵⁾

『遠い崖』によると、²⁶⁾パークスは旗船プリンセス・ロイヤル号上の多数の見物客、藩士の大砲・機械の視察、陸海軍や科学に関する質問、儀礼的訪問に加えて家族の紹介という独自性の存在に加え、「宇和島は、領土的にはほとんど重要性をもっていない。(○中略)その港はすばらしいものだが、主として茶と蠟の輸出からなるその商業は、まだ非常にとるに足りない量である」と、貿易相手としては低く評価し、「藩主は、その商業の発展のために兵庫の開港に期待している」と、英国船の寄港の要請とともに、兵庫開港に賛成の姿勢が示されたと伝えている。

アーネスト・サトウの訪問

アーネスト・メーソン・サトウ(Ernest Mason Satow)は、英国公使館付きの通訳官であると同時に、日本学の権威である。すでに、その回想録『一外交官の見た明治維新』

(坂田精一訳・岩波文庫)によって広く知られている。また、萩原延寿『遠い崖』—アーネスト・サトウ日記抄—(全14巻, 朝日新聞社)によって、詳細な研究がなされている。

慶応2年秋, パークスは近畿以西の西南諸藩の情報収集をキング提督に命じ, サトウも通訳官として同行することになった。プリンセス・ロイヤル号に同乗して, 兵庫・下関に寄って長崎に行き, その帰途はアーガス号に乗って鹿児島・宇和島・兵庫を経て横浜に帰航する予定であった。サトウの役割(パークスの訓令)は, 端的に言うと, (1)英国政府はとくに兵庫開港を主張し, 大名たちに納得させること, (2)日本の主権の所在に関する内紛には, 英国政府は介入せぬことを明言すること, (3)予定されている大名会議, 長州問題の解決, 外国貿易に対する兵庫の開港, 一橋慶喜および諸党派一般の状態について情報収集の3点にあった。

サトウは11月17日夕方, 長崎に着いた。21日, 彼はアレキサンダーの姉(楠本伊篤)の家に連れてゆかれ, 「若い宇和島藩士」ハブタイ・シンスケ²⁷⁾に会った。24日, 井関斎右衛門(盛良, 慶応2年6月22日, 目付・軍使・元締兼帯, 物産方引受・蒸気船船将。10月に天保録で長崎に行っていた)に会い, 宇和島藩の情報を収集した。井関は「長崎で, 私は数名の宇和島藩士と知りあった」²⁸⁾なかで, もっとも重要な人物とされている。井関は京都で予定されていた大名会議は, 当分延期になったと告げた。しかし, いずれ会議が開かれることはまちがいなく, その会議の第一の議題は長州問題であると言った。宇和島藩にとっては兵庫開港は有利であった。また, パークス, キング提督の宇和島訪問は, 宇和島人に外国人の様子や艦船・銃砲の操作を周知させるのに役立ったと語った。サトウは, 井関が「現在は一時的に古ぼけた蒸気船兵庫丸に乗り組んでいる。かれらは, もっと良い船と取りかえるため, この船を長崎に回航したのである」と記している²⁹⁾ここに言う兵庫丸は明らかに天保録のことで, 前述した購入時の文書に「蒸気兵庫船壹艘」とあるのをみれば, 同船は兵庫丸とも言われていたのであろう。サトウは, 次の大名会議の主要議題が長州問題と兵庫開

港問題にあり、一橋慶喜は將軍職に就任していないことを確認できた。

翌25日、サトウは伊篤方で井関とオガワ・ハンザエモン（尾川半左衛門、慶応2年6月24日、蒸気船乗組、10月2日、物産方用向惣差配兼帯、同3年7月17日、蒸気船地他御用引受）に会った³⁰⁾。話は外国船の下関海峡通航の自由の確保の問題から始まった。井関らは下関に軍艦1隻を配備した件に触れ、サトウは長州藩の要請によったのではなく、幕長戦争中、英国政府が通航権確保のため行ったのであり、「われわれは、日本のいかなる内紛にも干渉しません」と答えた。さらに、長州藩は通航を妨害しないことに同意し、薪水その他の必需品の購入を保障し、砲台は築造しないと約束したと語り、下関戦争の賠償金を幕府が支払うこと、日本人の海外渡航の許可についても幕府が譲歩したと言った。井関らはこうして外国交際の実際について学び、サトウの見解に同意し、兵庫開港（期日は1868年1月1日＝慶応3年12月7日）も実現させるという英国の政策も知った。馬関（下関）は現在の条約では不可能とした。

11月26日、サトウはアーガス号に乗り、翌日鹿児島に着いた。磯の集成館に泊まり、すでに来ていた3人の英国人から琉球での砂糖工場の建設、紡績工場のことなどを聞いた。家老新納刑部にいろぎょうぶ（英国留学生の1人）に、大名会議の延期、薩摩藩の長州支持論について聞いた。29日にはガラス工場（薩摩切子）、弾薬工場・大砲鑄造所（反射炉）・鍋釜製造所を見学し、キング提督の薩摩藩主に対する書簡の返書を受領した。薩摩藩の兵庫開港ならびに慶喜宛ナポレオン三世書簡の件、長州藩の関係についての情報を得た。

11月30日鹿児島を出航、12月1日午前11時宇和島に入港した。サトウの宇和島観察の文章は有名である。藩主宗徳が非公式に訪問し、タテイ（田手次郎太夫、慶応2年6月22日蒸気船付物産方御用、3年7月17日物産方当用用捨、11月12日船手組蒸気船將支配）も来た。田手は兵庫丸の船長でもあった³¹⁾。「竜山公記」によると³²⁾乗艦アーガス号は樺崎埠頭に繋船し、目付西園寺雪江・田手次郎太夫・三瀬周三が訪問した。キング提督は「年始（新暦1月6日）ノ祝詞を申入ルタメニ」来航し、祝詞を提出した³³⁾。翌2日、都築莊蔵がその来意を

謝した。松根図書、午後宗城・宗徳らも訪問し、3日10時、船将・士官・歩卒約30人が猪越に行って射的し、藩の士官も射的し、これを宗城・宗徳が見た。午後2時には帰邸し、船将ら6人が参殿し、書院で饗応され、薩摩藩士林謙三も陪席した。夕方、西園寺雪江が宗徳の答書³⁴⁾を持参した。4日朝6時出航し、兵庫に赴いた。キング提督の来航は、長崎奉行能勢頼之に報告され、幕府への気遣いが表れている。

『一外官の1日見た明治維新³⁵⁾』『遠い崖』4³⁶⁾によると、サトウは松根内蔵と船室で、慶喜の將軍就任問題、老中小笠原長行の小倉口の戦争における逃亡の件を話している。2日、宗城との会話では、宗城は仏公使ロッシュが「幕府と親密な関係にある」ことについて話しはじめたが、図書がこれを遮った。この日、サトウは樺崎砲台の隊長入江左吉³⁷⁾(元治元年11月7日大銃司令)の自宅に招待され、砲兵士官森猪之助(4人分銀5枚、割増にして286匁6分)、下級士官2人も来て酒宴となり、この晩、サトウは入江宅に宿泊した。

翌朝9時、サトウはいったん艦に帰り、午後2時、射撃場(丸穂村野川の猪越)に行き射撃したが、宇和島藩の射手の方が上手であった。それから「御殿」に行き、宗城と対談した。第一に兵庫開港問題、これについては宗城はパークスと話したことがあるが、現在では開港を望み、一橋慶喜も同意見であるといい、自分は仏人は嫌いで英人が好きだと洩らしている。これに対し、サトウはフランスの政策は將軍をこの国の元首とし、その元首と条約を結んだ以上、彼の地位を高め、可能な限りの援助をしていくという見解だが、イギリスは日本と条約を締結したのであり、將軍個人と結んだのではない、「將軍が存在しない現在(○家茂の死去)条約は効力をもたないことになるであろう」と述べた。

「日本の内政にも干渉せず、国内紛争の解決は日本人自身の手によだねる」と付け加えた。宗城は内戦の長期化は貿易に被害を与えるから、「イギリスは内戦の早期解決に手を貸した方がよい」と言った。サトウは「それはちがいます」、内戦に干渉すれば、その解決は十倍も難しくなり、貿易は完全に停止することになると答えた。

宗城は「日本は天皇を元首とする連邦帝国 (a confederated empire) になるべきであり、薩摩と長州も、おなじように考えている」と述べた³⁸⁾しかし、宗城はあくまで徳川家の存続には執念を持っていた。そこから、サトウの『英国策論』(English Policy)³⁹⁾の内容に触れ、宗城もすでに読んでいた。サトウは薩摩藩船の横浜入港、幕吏による貿易拒否の事実から説き起こし、「独立大名」(国持大名)の、具体的には薩摩藩商船の貿易の自由を、日英通商条約14条(自由貿易の条項)によって主張する⁴⁰⁾サトウは、現行通商条約によって、幕府は貿易を独占し、ここに幕藩対立の基本があると考え、幕府は外国人の大名との直接交渉を不可能にしている、また外国人殺傷事件、「両刀階級」の敵意についても分析した。サトウは「大君」(将軍)を「諸侯連合の首席」(the head of a Confederation of Princes)とし、日本の政治体制は将軍独裁ではなく、諸侯(Princes, 雄藩)連合と認識している。「大君」は諸侯の一人であり、一国の統治者ではなく、従って独立諸大名が条約に反対するのは当然であり、諸侯の排外意識の基盤となっているとする。連邦帝国なり諸侯連合なりの構想は、幕長戦争を通じて広く認識されてきていた。諸大名は外国貿易による利益を痛感し、軍事力の強化のための武器の購入についても、幕府の介入を排除したかった。藩領内での開港を求めるのは薩長両藩をはじめ、独立大名であり、鹿児島・下関はその代表となろう。領内の開港の実現のためには根本的変革、連合諸大名との条約締結の問題(雄藩連合)が必要となる。この点について、宗城も同様の見解を持っていた訳である。つづいて、宗城とサトウは第二次幕長戦争で敗北した小倉藩について話し、宇和島藩が小倉の産米を買ったと宗城が話した。その後大宴会となり、サトウは松根図書邸で、内蔵・林謙三⁴¹⁾と3人で同じ部屋に寝た。

翌4日6時半、アーガス号は出航し、兵庫に向かった。翌年1月5日、サトウは宇和島に残してきた従者野口富蔵・安次郎の2人を都築莊蔵が兵庫に連れてきてくれた。内蔵と莊蔵らはその後もたびたびサトウと交流している。

ウ) 宇和島藩の割拠体制

対英接近と軍制改革

第二次幕長戦争における幕府軍の敗退、7月20日、将軍家茂の死去、9月2日、幕長休戦協定、12月5日、一橋慶喜の将軍就任という政局の急展開のなかで、征長において中立性を保持し、パークス、アーネスト・サトウの来訪をうけた宇和島藩は、対英接近による軍制改革を実施し、富藩強兵策を継続しながら、同時に避戦の姿勢を固めて、幕末の政局を乗りきろうとして行く。

慶応2年7月12日、5月付の西洋風練兵心得の幕達が届いた⁴²⁾ 幕府は先年から「西洋銃隊調練之義者、外国之利器要術を採、御国之御武備一際御厳整」にするという方針であったが、近来は「外国人ニ斉き服を著用」するなど、華美、異様の服制をし、これを禁止しようとしたものであった。

同日、土佐藩の使者後藤象二郎・旗本中浜万次郎が来藩した。これは同年2月、後藤が鹿児島に行き、島津久光に引見して、公武合体派としての藩土協調をはかったが、すでにその時を失っていた。宗城は後藤らに会ったが、後藤の来藩の狙いは明らかではない。後15日夜長崎に向けて出立している。すでに、5日に土佐藩士由比畦三郎・松村周助も長崎行の途次に来藩し、さらに近日使者10人が来藩するといっているところから、公武合体に関する宇土盟約、長崎貿易の件が主題であったと考えられる。

宇和島藩は萩森厳助に命じて英国の兵学を学ばせ、さらに慶応元年春以来、「外夷其外諸国事情探偵」として長崎に滞在していた。萩森は三公（春山・宗城・宗徳）からの注文品の購入にも当たり、多忙のため英学の修行に支障を来たすとして、千石夫1人を渡され、7月26日に長崎に出立している⁴³⁾ このころ、小銃隊練兵は御徒以下の下士までを加えるようになり、松田源五左衛門・安代鶴夫が指揮している。7月20日、長崎で英学・医学を学んでいた芝三也に、雑用科年24両が与えられることになった⁴⁴⁾

8月2日、森猪之助が大砲指南専任、松本司書が森の後役として奥鉄砲頭に就任した。また、この日、杉山平学に、9月2日伊能英次郎に長崎での仏蘭西

学の修行がそれぞれ命じられている。⁴⁵⁾ 同日、足輕の銃隊組織化と調練の強化と、施条銃所有者の技術向上、不所持者へのゲヘール銃の貸与が命じられた。

8月17日、若松総兵衛倅幹太郎に再び英学修行のため江戸派遣が命ぜられ、外国人と交際の必要から旅費とも59両2分が支出された。⁴⁶⁾ 翌3年3月11日、幹太郎は横浜で修行していたが、パークスが大阪へ行くため同行して出帆した。⁴⁷⁾ パークス、サトウはアーガス号で大坂に行き、慶喜に謁見を求め、さらには兵庫・新潟の開港、大坂・江戸の開市を直接に交渉しようとしていた。⁴⁸⁾ なお、幹太郎の上京には、大森忠左衛門組莊市弟泰助が仏蘭西学修行のため同行している。8月28日、藩は長崎に行く者に、関所通行のための通行判鑑(藩印)20枚を作成し、井関斎右衛門に渡し、物産方の便によって萩森厳助に送っている。⁴⁹⁾

9月2日、須藤但馬に物産方引受を命じ、また、威遠流引受者に試みに銀札26貫727匁6分7厘、外に鉄銅77貫500目の経費で、「仏蘭西国形ホートホ・井ッスル砲弾薬共1挺」を製造させることとした。⁵⁰⁾ 大量の砲弾製造であるが、それはまだ青銅製であった。同月7日、蒸気船で他国との商品運搬について、希望者には貸与の便をはかることを郡奉行に布告させ、市中は融通会所、郷中は浦々へ出願することとし、その統制を始めている。⁵¹⁾

9月11日、土佐藩士が城下新町口に来て、門番や市中は奇兵隊が来たのかと疑った。それは九州渡海を目的とする佐々木三四郎、毛利恭助・中山左門七・島村祐四郎・佐井寅次郎・藤本淳七の一行であった。同月27日には、上甲貞一・西園寺雪江が、宗城の上京に先立って出発している。⁵²⁾

9月16日、藩は「軍陣着服」(軍服)を定め、出陣・練兵の際に必ず着用させ、旅行・平常でも着用を認めた。⁵³⁾ これによって、士分(重役・虎之間、中之間・御徒間)足輕等等の家格が軍隊の階級、銃技の熟達度を示すものに変化した。

9月21日、熊本藩家老長岡良之助が蒸気船で樺崎に来着した。⁵⁴⁾ 大坂から熊本への帰途で、井関斎右衛門・桧垣弥三郎が会い、長岡は上陸して、藩主宗徳、

松根図書・桑折駿河らに会った。翌日出帆したが、その目的は薩長倒幕派への対応に関するものと考えられよう。10月14日、藩は家老以下入江左吉・松本司書ら多数に「練兵熟達」を褒賞しているが⁵⁵⁾この頃には軍制改革が一応完了したのであろう。10月2日、片山寛造・井関義江らが「近日蒸気船解纜ニ付、今日乗組ノ旨届出」とあり⁵⁶⁾宇和島藩が船名不詳の蒸気船を購入し、長崎貿易・小倉米の購入をしている事実がある。天保録の船将井関斎右衛門・田手次郎太夫ら以前の蒸気船関係者に、宗徳は「汽船ノ件」を尋ねている。天保録に代わる蒸気船と考えられる。

慶応2年10月7日、藩は「大小銃隊及其心得」を定め、旅勤・在番・修行留守の者も入隊を命じることにした⁵⁷⁾これによると、旗本小銃隊は水野八左衛門（白筋3本）ら上士分67人、同大銃（砲）隊が安田甚内ら6人、小銃方世話方原田玄太（同5本）・壱岐孫四郎の2人である。旗本組の士分は計75人で、藩主の親衛隊で小性組の差配下にあった。前隊小銃隊は橋本郷右衛門ら42人、同大銃隊は高橋九右衛門ら6人、小銃隊世話方1人、計49人で、大頭は桜田大炊である。後隊小銃隊は小梁川内記ら38人、大銃隊は桜田兵庫ら8人、小銃総隊教授安代極人、計49人で、大頭は宍戸弥左衛門である。以上の虎之間以上の上士の外に、中士中の中之門小銃隊（3本～4本）小柳浅右衛門ら52人、大銃隊岩沢津右衛門ら35人、計87人、御徒小銃隊伊藤儀右衛門ら48人、大銃隊27人、計75人である。この外に小銃隊ラッパ手9人に小銃隊三浦肇ら20人、大銃隊2人、計31人が付けられている。以上の上中士の総計は366人となり、これに足軽らが加わるのである。これには庶子も動員されている。

12月14日、都築莊蔵が「京都詰方他藩応対形勢探聞」を命ぜられて上京した⁵⁸⁾11月12日、若松総兵衛の物産総差配解任、見届役とし、物産方創設以来「精励差配行届、漸次拡張し、永久御国益ノ基礎定ルヲ賞シ」、切米5俵を加増された。また、銅山休山のため、引受中平惣之允が免除され、御徒目付古沢又之丞が物産方出勤し、尾川半左衛門、川名謙蔵（7月17日物産方蠟坐引受）と合議を命ぜられた。この日、清水飛驒が長崎で「外国人スパンナル者ト親ミシニ、

彼レ日本大名ト親ミ、貿易ノ志アルモ、薩摩ハカラハ(○グラバー)ト結ベバ、宇和島ト取組ヲ為シ度旨ナレバ(○下略)」と、スパン(注59)の※)は宇和島藩と土佐藩の藩際貿易品をもって長崎貿易を着想し、飛驒は次の産物の調査をした⁵⁹⁾これによると、①仙過紙(泉貨紙)4,5千丸(代金1万2千両,12~4月まで)、②上茶5万斤(代金5千両,3~6月)、③椎茸3百石(代金3千両,3・8月,4月・9月に輸出可能)、④木附子2万5,6千斤(代金千両,8~9月に出来)、⑤鰯2万斤(代金2千両,5~8月)、⑥菅糸50貫目(代金2千両,4月出来)、⑦蕨粉3百石(同3千両,7~9月)、⑧巢蜜5千貫目(同千両,9・11月)、以上は「無間手ニ入申候事」、外に樟脳6千挺百斤入り(同5万4千両)は毎月5百挺ずつ出来、「直段次第」で入手可能、銅山は「末手開仕」、年により出来る、茯苓は沢山出来としている。ただし、①⑦は従来大坂向け移出品であり、⑧は直段「引合如何手覚無之」とされている。宇土両藩はその盟約的關係に加え、藩側貿易が可能であり、薩摩藩は宇和島藩の干加にしか注目しなかった。

このように、長崎貿易は船手役所で購入し「大坂捌」としていた土佐の国産物を「長崎捌」とすることによって成立するとされ、その頭取に清水飛驒、取計に田手次郎太夫を命じ、物産購入のため木原屋九兵衛を物産方雇とした。17日には小銃数の増加のため、火薬の製造・精製が必要となり、大超寺奥合薬製造場干場が狭隘のため増築している。12月2日には、軍制改革について「軍馬供連荷物夫ノ件」が定められ、上士層の騎馬を制限し、荷物夫は小荷駄隊で運送し、玉薬も同様とされている⁶⁰⁾この日、安代鶴夫が長崎に派遣されることになり、有田彦兵衛に賜品された。また、大銃指南は入江左吉・森猪之助、諸器械は松田源五左衛門、火薬は中野五郎兵衛の専任とされた。7日には、須藤司馬・三輪規・緒方英馬・甲斐光太郎・芝悰之助・渡辺藤太に威遠流小銃相門取立方、鈴木源兵衛ら3人が小銃玉薬運送隊頭取に任命された⁶¹⁾

慶応3年1月5日、江戸で、家老桜田出雲が定府の藩士に「御国勝手」、つまり宇和島帰国を命じた⁶²⁾その主意は「去々年来中国筋動乱ニ付、両度御出軍も

有之处, (○中略) 全鎮静之義共不相聞, 今以京地も兎角不穩, 此先如何様之儀ニ可相成も難計」という時局認識にあり, 経費節減, 軍備強化を目的とするもので, 藩は割拠体制の確立をめざした。

同月27日, 藩士阿部権一郎が宿痾の治療のため長崎に行き, 途中下ノ関, また長崎は肝要の地だから兵学のため実地見分をし, 「万一ノ参考」にしたいと願い出て許可されている。慶応3年, 阿部の申し出により川口良泰次男伝良, 元締支配清介倅清一は蘭学, 次男隆三郎(藤田カ)は英学修行のため寄宿を許されている。この外兵学・洋学修行のため寄宿・扶持支給者は, 2月27日, 大森忠左衛門組惣一弟久市(英学修行として寄宿)があり;⁶³⁾ 宇和島藩の海外認識が, パークス, アーネスト・サトウらの宇和島訪問によって新しく展開したといえる。例えば, 同元年正月27日, 宇和島袋町1丁目道後屋兵一(彦兵衛弟, 15歳)は, 本町1丁目近江屋恒三郎とともに, 英学修行のため長崎に行き, 藩から年金38両を支給された。この時, 萩森厳助・野田律斉(医師)も同行し, 同月25日, 外国事情探索のため若松幹太郎も派遣された。⁶⁴⁾ 同3年9月頃, 兵市(17歳)は英商コロウル⁶⁵⁾に随従して長崎からスコットランドに行った。明治2年3月10日, 伊達宗徳家来渡辺兵一(当年19歳)は現在スコットランド滞在中と新政府外国官に届けられている。⁶⁶⁾ 同3年7月8日, 外務者は兵一の留学旅費手当の支給について藩に問い合わせているが, 同月13日には帰朝の報告がなされている。翌4年正月18日, 卒渡辺兵市(当時日置兵市, 21歳)は, 英国スコットランドのアハテン(アバディーン)の学校で英学修行し, 先般帰国したのでその身限り士分に列すると政府に届けている。⁶⁷⁾ また, 三瀬周三の英蘭学稽古所で英語を学んでいた城下商人の子隆三郎(藤田)は, 明治3年閏9月11日, 外務有に出願し, 英人アストン(Wiliam George Aston, 英外交官, 日本学者。パークスのもとでサトウとともに通訳)に従って横浜から英国に渡航している。⁶⁸⁾ 幕府・薩長両藩等には遅れながら留学生が派遣された。

臨戦態勢の強化

慶応3年2月2日, 小銃隊運送頭取鈴木源兵衛を免じ,
中野七郎兵衛・居坂八十八より上申のライフル銃火薬の少

量を補うため、硝石 40 貫目、硫黄 4 貫目、麻木灰 8 貫目の払い下げとその経費銀札 10 貫 450 目 2 分の下付を藩は認めている。22 日にはライフルの稽古撃ちの 1 カ年の火薬の予定を 100 貫目から 150 貫目に増加させている。⁶⁹⁾ 慶応 3 年の場合、火薬 85 貫目 (入費 39 貫 810 匁 4 分 6 厘 1 毛)、同 65 貫目 (脇田孫兵衛製薬、威遠流に回す)、計 150 貫目、管 8 万 5,000 (銀札 10 貫 750 匁) である。銃手は御徒以上 260 人、足軽 473 人、外に士分・足軽の子供 100 人余、総計 850 人となり、1 人につき火薬 100 目、計 85 貫目と計算されている。兵員は前年 10 月に較べて倍増以上となっている。弾丸も 3 月 17 日、原田玄太から「小銃玉鑄をハترون等製造ニ付」、従来の鉛玉に代って、「鋼買入、併テ七百七拾目ニテ新調」とあり、鉄玉が主体となる。

また、宇和島藩の場合、殖産興業・貿易奨励の挙藩実践にも拘らず、その実効の程は明らかでなく、幕末には市郷の有力者 (豪農・豪商) からの献金がもっとも確実な収入源であった。2 月 2 日、献金者への褒賞制が定められている。(1)郷士取扱い、金 150 両で佐々木三郎太夫順列、金 250 両で緒方陸之助・清家久左衛門順列、金 500 両で赤松宇太夫順列、(2)「御仮屋 御目見四人之者」の外、金 150 両で代々御目見・諸庄屋順列、(3)御召物拝領 (引両紋付上下・同帷子・外笹紋付上下)、郷中御目見の者に限り賜品。(4)一般農商の献金の賞は 30 目以下は賞詞のみ、40~300 目は酒代 1 匁 5 分、400~500 目は木綿 1 反、600~700 目は同 2 反、800 目~1 貫目は菱木綿 2 反であったのを、190 目以下は賞詞、200~600 目は酒代 5 匁、700 目~1 貫 400 目は木綿 1 反、1 貫 500 目~2 貫目は同 2 反と改正され、代々目見・苗字帯刀庄屋格の者が 200 両を献金すれば、代々庄屋順列と定めた。また、5 月 22 日、市中の豪商について、(1)留之間御礼、銀札 50 貫目、丁頭より。ただし平丁頭の場合は同 65 貫目、同 30 貫目 (宗門改役より)、同 10 貫目 (町年寄より)。(2)町年寄格、同 40 貫目、ただし平丁頭よりは 53 貫目 (丁頭より)、同 20 貫目 (宗門改役より)。(3)宗門改役格、同 20 貫目、ただし平丁頭よりは 33 貫目 (丁頭より)、同 20 貫目、長山久助。長山家は代々目見・苗字、家督相続の時宗門改役次席嫡子の格式で、苗字「町年寄直宛」

であったが、町年寄格となった。(4)長瀧陽太郎・内山助右衛門・居村如助は銀札29貫目ずつで、代々苗字御免であったが、宗門改役格となる。以上の市郷有力者の献金によって、従来の家格制はかなり変更されよう。

2月5日、土佐藩士喜多村彦太郎・内身克兵衛が来藩し、木原半兵衛・上甲貞一・都築莊蔵・斎藤丈蔵に面会を求め、木原(元締役)が応接している。⁷⁰⁾これは政局打開のための方策についての情報交換のためであろう。

2月8日夜半、斎藤丈蔵が京都から帰り、老中板倉勝静から將軍家茂の死去・国喪につき、征長軍の解兵を伝えた。⁷¹⁾同月11日、田手次郎太夫・井関義江・片山寛蔵が長崎から帰っている。翌12日、入江左吉・森猪之助は、大砲煩手を増加しても射撃しなければ実用に適さずとして、「誠ニボート忽微砲十三臼砲及新ニ製造ノ山砲共、総玉数五百丸、火薬六拾五貫目」の支給を求め、破裂弾使用の必要を言っている。同年600発の稽古、来年は339発を予定し、2、3年の試撃で煩手の熟達が可能としている。3月7日、天砲弾・26斤砲弾の鑄造について、鉄丸45、「内三六斤二十丸十五、^(ママ) 姆三十五丸」を銀札9貫457匁3分4厘で製造を伺い出た。また、「弾盤八十斤六十」を銀札600目、「三十六斤同三百目十八斤同十二斤百二十同六百目」、計1貫800目で新調することになった。樺崎砲台の強化であり、それはもはや攘夷ではなく、内戦を想定していたと考えてよい。「更ニ取調、榴弾二百丸、榴散弾百丸^{準備ノ分ニテ足ル別ニ製造ヲ要セズ}、榴散弾ハ三分一、霰弾百八十九^{内三十丸新調}、木底蓋三十、代銀札二百七拾匁^{壹ニ付九匁}、底鉄板三十枚、代銀札一貫五拾目^{壹枚ニ付三十五匁}、ブリキ板^{不足セバ尙出ベシ}、ゲベール玉一万九百四十^{榴弾百九ニ用ユ、一丸ニ六十五入宛、霰弾三十九ニ用ユ、一丸ニ百四八入、御兵具方ヨリ相渡シメヨ}、鋳鉄千七百七拾五本、同百七拾三匁式分五厘、木管三百廿五本、代同一貫六百廿五匁^{一本ニ付五匁宛、木六品渡リ}、銅管千七百本、代同六貫八百目^{一本ニ付四匁位}、弾盤三百廿五、代同一貫四百六十二匁五分^{二ニ付四匁五分位}、弾薬箱六十五^{作事ニテ製作、此分ハ半数ト為シ難ケレバ従前ノマヽヲ要ス}」と伺い出て許可されている。⁷²⁾当時、宇和島藩の軍事費は独立の予算から支出され、鉄は町人三原喜左衛門から古鍋を購入し、古鉄は納品1貫目に1貫500目の割で、現品で三原は払い下げていた。

さらに、入江・森は小川守衛ら7人に軍用支度向手伝の発令を受けて、(1)薬

袋に使用する「サーイ古物」がないため、玉数を減じ薬袋製造を略し、次に軍用玉製造の時につくるとして、銀札4貫95匁(1人に付35匁)を見積もっている。(2)紙管は上製となり、銅管1,700本を軍用としていたが、紙管使用のため銅管は半数の850本としたい。「舶来之引抜管」を軍用として千本購入して欲しい。引抜管は雷粉方で製造可能である。このように、詳細不詳だが、長崎貿易を通じ、また藩の倣製によって、宇和島藩の兵器は実戦使用に堪えうるものとなっている。22日、入江・森は、弾薬箱運搬のための馬の荷鞍の製造を願い、「野戦銃玉^{太小}_{最安}2千丸」(鉄569貫900目、一丸につき炭工役ともすべて銀札10匁宛として、計代20貫目)、さらに恵美須山大銃稽古用の古玉として、15寸和微砲・12封度加農の両方を取り交え81丸、このため鉄566貫900目の内で使用する。20寸天砲1台、これはもはや修理も不可能のため、銀札計3貫190目で新造する等としている。宇和島藩では、鋳物師・鍛冶その他の軍事技術者の組織化ができていることをうかがわせる。

2月22日には、脇田民助倅義助が文学修行のため江戸に派遣されたが、内外の「形勢切迫トナリ、是迄御境外へ一步モ出シコトナケレバ、固陋迂遠トナリ、近来諸西洋風日ニ盛トナレバ、彼レノ情実等総テ知ラザレバ、責テハ崎横浜ニテモ目撃シ、参考ノ一端トナルベク(○下略)」として、藩の許可を得ている。⁷³⁾一般藩士にしても、安政・文久年間とは異なる海外認識を得ようとしている。27日、安代鶴夫は施条銃射的場を猪越に新設し、桧垣助三郎は、藩が元治元年に購入した「シャープライフル」銃を、「嘗テヨリ元込銃懇望ニテ注文セルモ未タ得ザレバ、附属品ヲ併テ元価ヲ以テ御払下ヲ願出」、銀札12貫842匁3分を上納して認可されている。上士階級は最新式銃を手にすることができた。

3月朔日、宗徳の「御意」として、「近年来非常之費」、「去秋之天災違作」のため、「軍備窮民扶助等内外之所置不行届」として、「増用立」(借上)を命じた。⁷⁴⁾宗城の在京・軍備の増強は藩財政を圧迫していた。7日、入江・森は樺崎・恵美須山両砲台大砲の付属火薬桶等を計銀札9貫837匁8分3厘で新調を願い出た。また、「ホート銃」4座の口径が異なるため、これを一様にする必要があり、

その経費は板鑪1枚・釵炭工役が同350目、鑪柄拵大工2人半役に同166匁2厘、ホート4座鑪入諸費用同3貫152匁、計3貫668匁2厘の下付が認められた。この時、物価騰貴、「終日詰切」を理由に、鉄砲師国友権四郎は雑用料を5割増とし、1日7匁5分を賜うことになった。御持筒倉一・弥太郎は、前年9月から山砲製造に従事し、倉一に銀札200目、弥太郎に同150目が与えられた。⁷⁵⁾

3月10日、江戸高輪英国公使館で修行中の若松幹太郎は、イギリス公使パークスが軍艦で大坂に赴くのに同行を勧められ、藩の認可を得る暇もなく11日出帆、13日着坂、英国旅館に滞在し、父総兵衛が藩から金25両を借用している。これもサトウの勧誘によるものであろう。⁷⁶⁾

同月17日、長崎御用達有田彦兵衛が解任されている。桜田大炊(城孫助と変名)・梁川荘左衛門・桧垣助三郎らが江戸へ出発した。⁷⁷⁾ 2月に蒸気船で林基吉郎らが先行している。これは「外国船ニテ行違出来シヲ以テ」とあり、英国公使館との関係・接渉が考えられる。4月12日には、袋町1丁目増原新十郎が蒸気船御用精励につき、藩主宗徳に目見を命ぜられていて、⁷⁸⁾ 貿易関係も考えられる。

6月7日、長崎物産方役所を設営し、東筑町俵屋新兵衛に船定宿を命じ、藩内の船の積荷等を一括取り扱わせることにした。⁷⁹⁾ 12日、目見以上の武士に長防処置・兵庫開港の朝命が伝達された。⁸⁰⁾ 藩は後者に備えて、保内組川之石浦の豪商矢野小十郎、矢野組卯之町の豪商清水(池田屋)長十郎らを、前年から製産場に付属し蒸気船の所轄機関である水師場商用係(製産場長兼水師場長は田手次郎太夫)に登用し、松根図書の諮問に応じさせていた。⁸¹⁾ 慶応3年4月、矢野は田手とともに摂津・兵庫に出張している。すでに松根が上坂して藩の用達鴻池重太郎を鴻池市兵衛に代え、兵庫開港後はさらに兵庫に金主を求め、国産物(主に木蠟)の輸出を試みようとした。矢野は従来からの商慣習からも大坂を有利としたが、兵庫は海陸の要地であり、神戸に開店し、兵庫の間屋塩屋安兵衛を用達にしようと考えている。

7月14日、去秋から江戸で仏蘭西学修行に大森忠左衛門組莊市弟泰助があり、物価騰貴のため藩から25両を借用している。⁸²⁾ 8月9日、上田亮太郎が蒸気船修行のため長崎に行っていたが、やはり物価騰貴のため50両を借用している。⁸³⁾ 11月、同年夏以来、賀来幸右衛門が開産丸⁸⁴⁾で修行していたが、3日に帰藩したとあり、賀来も蒸気船乗前修行をしていた。⁸⁵⁾ 12日、田手次郎太夫の伺いに、三御殿(春山・宗城・宗徳)から長崎への注文品、家中注文品を物産代金で購入すると物産方の莫大な損失となり、「御軍備御一新」の時に武備の整備を専一に諸品を購入しているので、物産方の体制を固め、札座の銀札発行元入金を確保することを求めている。⁸⁶⁾ (未完)

- 1) 「竜山公記」巻9 4月14日条
- 2) 同 同
- 3) 同 巻10 5月22日条
- 4) 同 5月25日条
- 5) 同 同
- 6) 同 同
- 7) 新城村亀甲文書「万日記」。同年6月23日条
- 8) 「竜山公記」巻9 3月17日条
- 9) 同 4月7日条
- 10) 『松根図書関係文書』101ページ
- 11) 五代の鹿児島帰着は3月11日である。『薩摩藩英国留学生』107頁。中公新書。
- 12) 『松根図書関係文書』94ページ。恒之介は当時英学修行中の宇和島の町人・近江屋恒三郎であろう。
- 13) 同 98ページ
- 14) 外海浦庄屋小幡家文書に、「約定書 一、金貳千五百両 右兼而御相続申上候富有丸船代之内、如紙面御渡申上候、残金五百両之处、来ル十日限御渡可申候、尤其節込者当港(○長崎)江相繫置候間、御番人御付添可被下候、万一相滞候節者、右船御引取可被下候、右ニ付国旗引替之儀者、双方御打合御達済之上引替可申、依而證書如件 慶応三卯八月朔日、伊達遠江守内二宮又兵衛印 松平越前守様御内木内甚兵衛様」とある。又兵衛は篤四郎のことで、越前藩所有の富有丸(帆船か)を三千両で購入しようとしている。しかし、又兵衛は8月12日に長崎で殺害されていて、この契約が実行されたかどうか明らかでない。

「正二位公(○宗城)御履歴調書一」には、慶応3年10月22日、「此度於長崎表亞墨利加帆前船一艘買入申候ニ付、委細者別紙竝絵図面相添、此段御届申上僧、以上 伊達遠江守内

志賀甚左衛門」とある。この木造船はスクーネル型で船名開産丸（原名アルマー）、1862年建造（六ヶ年前打立）、131トン、長さ90フィート半、幅22フィート、深さ9フィート。米商ウラルスより購入。以上の事実によって、宇和島藩の富国強兵策のため船舶の購入が意欲的に勧められていたことが分かる。なお、天保録の購入には庄屋豪農からの借上金が5万6,000両に達している。『前原巧山一代噺』72ページ

15) 『前原巧山一代噺』46ページ。久留米藩が購入したと推定される。

16) 中根姓。播摩国加西郡西横田村の生まれ。安政元年5月、松尾方信の養子となり、文久元年宇和島藩に登用され、大坂で物産取扱いの用務に従事した。『北宇和郡誌』1,035ページ

17) 『松根図書関係文書』三 松根図書宛五代才助書翰・参照

18) 石井孝『増補明治維新の国際的環境』518ページ

19) 以下、石井前掲書

20) 「竜山公記」巻10 5月27日条

21) 同 巻11 6月2日条

22) 同 6月24日条

23) 「口達覚 英国ミニストル乗組之軍艦、近々江戸表へ相廻り候ニ付而者、御領海伊予宇和島江碇泊可致哉も難計、自然薪水迄請度旨申出候節者、諸事不都合無之様、兼而心得相違置候、寅六月」

24) 『松根図書関係文書』136ページ

25) 新城村亀甲文書「万日記」慶応2年6月28日条

26) 萩原延寿『遠い崖』3 『英国策論』316ページ

27) 前掲書4『慶喜登場』97ページ。これに相当する宇和島藩士はいない。ただ、伊篤は大野昌三郎と結婚していて、両人はほぼ同年であった。「若い」という語に疑念が残る。

28) 『一外交官の見た明治維新』209ページ

29) 萩原前掲書4 98ページ

30) 同 4 99ページ。石井前掲書参照。

31) 同 4 110ページ

32) 「竜山公記」巻14 12月朔日条

33) 呈書訳文

^(プリタニア) 貌利太尼亜女王殿下の船プリンセスローエル^船名、長崎ニて一千八百六十七年正月第一日、呈宇和島大守閣下

時ニ新年の始ニ御坐候へハ、朋友相互ニ賀詞を通し候事、欧羅巴人の風儀ニ御坐候

私去八月謹て閣下を訪問致候節、朋友と相心得候様にとの事ニ御坐候、依之今般私配下の船一艘を送り、閣下及御親^(ママ)属の安泰、無異の祝詞を呈するの時節を得申候事ニ御坐候、恐惶謹言

水師提督 ジオルジ キング

なお伊達文化保存会所蔵の英文書翰は写本である。(シーボルト記念館学芸員徳永宏氏の
教示による)。

34) 答書

新年之賀として遠海態々以使船貴翰被差越, 交誼之厚不堪感謝存候, 因而 楊下無異安全之
状を審にし珍賀之至, 猶幾久敷為 国自愛被致候様祈入候, 拙家瓦全希省候, 勿々拝復, 恐
惶謹言

伊達遠江守

伊達伊予守

英国水師総督 ジョルジ キング殿

35) 同書 218 ページ～

36) 同書 111 ページ～

37) 穂積陳重の母方の祖父。陳重は幼時入江邑次郎と称した。

38) 前掲『遠い崖』4 116 ページ

39) サトウが1866年3～5月, 「ジャパ・タイム」に3回に分け, 無署名で発表した日本の国
家体制改革案。徳島藩士沼田寅三郎の助けを借り翻訳した。『日本近代思想大系』1『開国』
岩波書店に所収。サトウは有能な通訳官であると同時に外交官としても急成長していた。

40) 石井孝前掲書 509 ページ～

41) 広島藩士安保清康。万延元年長崎の何礼之^{がれいし}の塾で英語を学び, のち英軍艦に乗り組み, 2
年間軍学を学ぶ。慶応2年薩摩藩の要請でさらに鹿児島の開成所に行き, 海軍の要請に従事
し, 当時はアーガス号で航海術を修行していた。

42) 「竜山公記」巻12 7月12日条

43) 同 7月17日条

44) 同 7月20日条

45) 同 8月2日条

46) 同 8月7日条

47) 「藍山公記」巻5の12 3月10日条

48) 『遠い崖』4 334 ページ以下参照

49) 「竜山公記」巻12 8月28日条

50) 同 9月2日条

51) 同 9月7日条

52) 同 9月14日条

53) 同 9月16日条。足軽以下は花色, 以上は並山股引。番頭以上は袖口印な
く, 背に「赤総角」を付ける。「有限ノ面々」は筒裡口に「白筋四ツ, 幅曲尺三步ツ」薄
色ナレバ御合印黒, 羽織の場合は袖口に斜めに同様の合印を付ける。虎之間は白筋三ツ,
幅曲尺三步, 中之間は白筋二ツ, 幅曲尺五歩, 御徒・御目見は同一ツ, 同五歩。葦山并股引

の合印は「左右脇江豎白筋、幅鯨沓寸」、足輕で威遠流熟練兵の免許者は「袖口沓寸白」、同熟練兵第一等威遠流の者は右肩に豎白筋1本、同第二等は左右の肩に白筋1つずつ。

- 54) 同 9月21日条
- 55) 同 9月29日条
- 56) 同 10月朔日条
- 57) 同 卷14 10月7日条
- 58) 同 11月8日条
- 59) 同 11月12日条, ※ Spahn, H. (Sehmidt, Spahn&Co) merchant, Nagasaki. (CHRONICLE&DIRECTORY, 1868). 日本女子大学・吉良芳恵氏の御教示により。国籍は不明。神戸にいたこともある。
- 60) 同 12月2日条
- 61) 同 12月7日条
- 62) 同 卷15 1月5日条
- 63) 同 12月27日条
- 64) 同 卷4 正月27日条
- 65) 山本有造『三人ガワー』京都大学人文科学研究所研究報告『一九世紀日本の情報と社会変動』参照。三人ガワーの内一人の変名か。
- 66) 「正二位公御履歴調書」6
- 67) 現愛媛新聞社高松支社長松友武昭氏の調査によると、アバディーン・グラマースクールで学び、成績優秀であった。同校は400年も続いた有名校で、兵市が少年のため、同校が選択されたのであろう。明治18年4月17日、米国公使訪問のさい、宗城は兵市を通訳としている。また、兵市は鹿鳴館の通訳をしていたともいう。
- 68) 「正二位公御履歴」10 隆三郎はロンドン大学で主に法学を研究したと考えられる。この外、米国留学生に城山静一がある。岩波『日本近代思想大系』16にその『演説法』が所収されている。
- 69) 「竜山公記」卷16 2月2日条
- 70) 同 2月5日条
- 71) 同 2月9日条
- 72) 同 2月12日条
- 73) 同 2月22日条
- 74) 同 卷17 3月朔日条
- 75) 同 3月7日条
- 76) 同 3月10日条
- 77) 同 3月17日条
- 78) 同 4月12日条

79) 同 卷 18 6 月 7 日条

80) 同 6 月 12 日条

81) 三好昌文『在郷商人の資本家への推転過程』(『愛媛近代史研究』31) 参照

卯之町清水家には庄屋清水家と池長清水家がある。中平周三郎氏の御教示によると、前者は甚左衛門頼哉一谷男(甚左衛門)篤候一静十郎一伴三郎と続き、静十郎は政治家として著名である。後者は初代池田屋長十郎一2代長十郎一3代長十郎(武蕃, 雑貨商。明治20年没。卯之町における養蚕製糸業・製茶業の先覚者)一4代長十郎一陸治と続いた。三好『商品経済と資本制の発達過程』(『愛媛近代史研究』18号・20号・21号) 参照

82) 「竜山公記」卷 18 7 月 14 日条

83) 同 卷 19 8 月 9 日条

84) 注 14 参照

85) 「竜山公記」卷 19 8 月 11 日条

86) 同 8 月 12 日条